

2011年サンマ

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数				量							
	漁獲	産地	輸入	輸出	東京			消費支出	在庫	加	工	
					生	冷	開	生(ㄱ)		塩干	塩蔵	缶詰
22	233	192.6	3.39	60.4	11.8	0.7	2.5	1,690	28.4	26.4	12.9	14.6
23	250	209.4	5.34	13.3	12.4	1.0	2.2	1,719	26.4			
%	107	109	157	22	105	141	86	102	93	0		0

年	産地	価 格				全サンマ			
		東京			輸 入	輸 出	水 揚	価 格	消費支出
		生	冷	開					生(円)
22	142	427	235	394	127	85	193.4	134	1,156
23	111	439	259	431	145	106	207.8	111	1,240
%	78	103	110	109	114	125	107	83	107

漁業・漁獲の動向と資源

太平洋近海から沖合にかけては日本、ロシア、台湾、韓国ともにほとんどが棒受網により漁獲している。日本のシェアは、2008～2010年の平均で57.0%であった。戦後の棒受網の導入により、日本の漁獲量は1950年代から増加した。漁獲量は短い周期で増減を繰り返しており、1990年代半ばには高水準であったが1998、1999年は低水準となった。その後再び回復して2008年には過去30年で最高に達したが、2009、2010年に連続して減少した。

2011年漁期前調査による西経165度～日本の沿岸のサンマ資源量は311.3万トンと推定され、この海域の資源量は2010年より増加した（前年比148.0%）。2011年級の加入尾数は、795億尾で2005年以降では3番目に高い水準であった。CPUEは1980年代後半から上昇して1991～1997年は高水準であったが、1998、1999年に大きく落ち込んだ。2003年以降は回復して2008年にピークを迎えたが、2009年以降は2年連続して減少した。2010年漁期のCPUEの水準から資源水準は中位、最近5年間の資源量の推移から資源動向は横ばいと考えられている。

23年の漁獲量は前年をやや上回り25万トンであった。

本年は震災の影響もあって、全サンマ登録の隻数は、145隻で前年に比べ18隻減少した。

本年も操業に当たって、各種休漁措置は前年同様実施された。乗組員の休漁のための自主休漁（48時間）、臨時休漁（24時間休漁）2回、水揚げ回数制限等が実施された。また福島原発100Km圏内での操業自粛措置もとられた。またロシア水域内操業も9月30日（10月1日早朝）で終漁となった。

本年も前年同様7月8日から流し刺網、同16日には5トン未満船の棒受網、23日及び26日（ロシア水域に入域しない漁船が23日）には10トン未満の棒受網の操業が開始された。そして全国サンマ漁業協会所属の棒受網の20トン未満小型船が8月2日、同20トン以上100トン未満中型船が8月5日、同100トン以上大型船が8月15日の解禁となった。

本年のスタート時（7月）の漁は道東近海で主に流し網の操業であったが平年をやや下回る漁であった。しかし8月に入ってから漁場も広範囲に広がり始め、近海とロシア水域も

含め徐々に好転し、前年の2倍の水揚げとなった。9月に入ってから昨年は上回る水揚げとなり、10月、11月と昨年をやや上回り、結果的には昨年をやや上回る水揚げとなり12月中旬をもって終漁となった。その結果総水揚げも昨年をやや上回った。

本年の初期漁場は流し網が昨年同様道東近海で始まり、8月に入って大型船出漁前の漁場も当所は道東近海と、153° E以東、中旬以降は色丹の南東～東側のロシア水域にも漁場が形成され、下旬には色丹南東沖に集中した。

9月に入ってから上記漁場が長く続き、下旬には襟裳岬南東海域にも形成された。10月に入ってから、ロシア水域での操業は終わり道東近海～沖合、襟裳岬南東と広く漁場が形成された。中旬に一部魚群の南下の気配もあったが、結果的には大きな南下はみられず、三陸近海にはできなかった。11月に入ってから、上旬襟裳岬南東沖～三陸近海の2か所に分かれ、中旬には宮古沖合に集中し、下旬も同様であった。12月には、釜石沖合の145° E周辺に漁場が残り、最後まで続いた。本年のオホーツクでの漁獲はなかった。（前年：855トン）

魚体長は、本年は大型（29cm～32cm）の組成が引続きやや増加し、通算では大型62%（57%）、中・小型38%（43%）であった。今年は12月上旬まで30cmにモードがみられ、大きかった。

魚価は、初漁期の7月には、震災の影響で在庫も少なく、魚体も大きく高値推移であったが、8月は漁が伸びたこともあって急落した。例年2ケタ台に落ちる9月も本年は下落したものの、140円前後をキープし昨年並みに比較的堅調に推移した。10月以降は落ちてきたが極端な下落とはならず、前年をやや下回った程度であった。また輸出が激減したこともあったが、価格は在庫も少ないことで極端な下落にはならなかった結果、浜値は111円で前年（142円）下回ったが3ケタを維持した。

また本年は、大手スーパーによる産地（久慈、大船渡港）での1船買いもみられ、新たな流通の模索もみられた。

在 庫 量

本年は4万トンと近年では最も少ない越年在庫から始まった。こうした中、3月11日の震災により冷凍冷蔵庫の津波被害等により、3月以降急激に在庫は少なくなった。そして3月から8月まで極めて少ない在庫で推移し、7、8月には1万トンを割る水準まで減少した。しかし心配されていた新漁が始まった以降、徐々に在庫は回復し、輸出の停滞もあって10月以降在庫は急増した。その結果越年在庫も4.5万トンと前年（4万トン）を上回るに至った。

平均在庫量は、8月までの在庫の少なさを反映し、2.6万トンで前年（2.8万トン）を下回った。

消費地入荷量と価格

23年の東京中央卸売市場の入荷量は、生1.2万トン、冷1千トンで前年（生1.2万トン、冷0.7千トン）を上回った。

本年は、産地での水揚げが震災（漁船被害や放射能問題）の影響もあって心配されたが、結果的には鮮魚は昨年をやや上回り、冷凍原魚も一時冷蔵庫の破壊によって品薄状況が続いたものの、漁期後半に消費地市場への冷凍魚の入荷も大きく増加したことを受けて増加したのが特徴。

本年も東京消費地における入荷サイズは漁期当初35-40尾サイズの入荷もみられたが、末端では大きすぎて1匹当たりの単価が高くなるなど売りづらい面も見られたが、その後は45尾、

50尾主体で推移した。

また、本年の塩干物の入荷は2.2千トンで前年（2.5千トン）を下回った。

本年も東京消費地価格のピークは例年7月にみられる。昨年は8月に入ってピークがみられたが、本年は再度7月にみられ、それ以降も300円前後を維持し、2年続けて堅調な市況推移であった。

平均価格は生439円（前年：427円）、冷259円（前年：235円）、塩431円（前年：394円）で、生は当初の高値、冷凍は端境期から漁期当初までの原料価格の上昇を受け、塩干は原料逼迫事情もあって扱いも少なく前年を上回った。

また消費支出（1世帯当たり）をみると、価格上昇を受け数量、金額とも増加した。

輸 出 入

本年の輸入は、5,337トンで前年（3,395トン）を大幅に上回った。

これは震災後の端境期に在庫喪失により、原料探し状態が続いたことで、一時的に輸入の急増がみられたことによる。

輸出は平成4(1992)年をピークに近年減少傾向が続いていたが、このところ増勢基調に転じた。しかし、本年は震災後の在庫喪失と原発事故等による各国の「輸入規制」の影響もあって1.3万トンと前年（6万トン）を下回った。

価格は、輸入145円（前年：127円）、輸出106円（前年：85円）であった。

輸出国は、本年もロシアが多かったが、シェアはかなり落ち6,144トンと46%まで落ちた。続いて中国は変わらなかったが、タイが台頭し韓国、ベトナムとなっている。